

2011年3月2日

京都市  
市長 門川大作 様  
京都会館  
管理者 京都市音楽芸術文化振興財団 御中

DOCOMOMO Japan 代表  
(青山学院大学教授 東京大学名誉教授)  
鈴木 博之

## 京都会館保存要望書

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、20世紀の建築遺産の価値を認めその保存を訴えることを目的のひとつとする国際的な非政府組織の日本支部です。別添資料にありますように、京都会館を日本近代の重要な建築遺産のひとつと認識し、本支部が2003年に選定した「DOCOMOMO Japan 100選」のひとつにあげさせていただいております。

ところが今般、京都会館の改修計画が進んでいるという旨の新聞報道を受け、同建物の保存を改めて要望する次第です。

ご承知のように、京都会館は、1957年に行われた指名設計競技を経て、日本を代表する建築家・前川國男の設計によって1960年に完成したもので、鉄筋コンクリート造、地下1階・地上3階、建築面積7,779㎡・延床面積16,852㎡の建物です。

岡崎地区という、京都市内でも屈指の歴史的・文化的環境の中に建ち、近代性と歴史性を両立させたデザインによって伝統的な風景に溶け込むと同時に、京都における文化活動を支えるという大きな役割を果たしてきました。

京都会館の価値は高く評価され、1960年度日本建築学会賞（作品）など多くの賞を受賞しています。また2005年には、本会の上部組織であるDocomomo Internationalの前会長であったMaristella Casciato 女史が現地を見学した上で高く評価し、その保存の必要性を訴える手紙を、当時の京都市長であった柘本頼兼様宛に出しています。

そういったさまざまな評価にも共通するこの建物の歴史的・建築的価値は、以下の3点にあることができます。

### (1) 戦後の日本におけるモダニズム建築の展開を示す代表的事例であること

モダニズム建築とは、20世紀初頭の欧米において、鉄筋コンクリート造や鉄骨造という新しい技術を背景とし、合理的・科学的な設計思想に基づいて生まれた一群の建物のことです。「国際様式」とも呼ばれたことからわかるように、地域性や歴史性には依存しない美学を追求し、直方体を組み合わせた幾何学的・抽象的な形態が主流となりました。しかしその後1950年代頃からは、建築のおかれる文脈を反映した形態や素材を取り込む新たな試みが世界各地で始まりました。

わが国においては、1920年代から欧米の影響を受けたモダニズム建築がつくられ始めたのですが、日本独特の展開が注目されたのは戦後のことです。そこでは、日本の伝統や国内各所の地域性が考慮され、欧米とは異なる独創的なデザインが生まれました。

京都会館は、まさにそのようなわが国独特のモダニズム建築の展開を示す代表的事例といえます。たとえば、中庭を設けそのまわりに2つのホールと会議場を矩折れ状に配置

し、ピロティとコンクリート製の欄干を組み合わせたデザインは、雁行配置の寝殿造りを連想させます。また、建物全体を巡る軒の深い曲面の庇からは、寺院建築のような荘厳さと秩序が漂ってきます。そして、打放しコンクリートの柱・梁の間の壁面に貼られた大型タイルによって、京都の伝統的町並みとの色彩や質感の調和が達成されています。

このような造形上の工夫によって、京都会館は、日本という文脈におけるモダニズム建築のありようを具体化することに成功しており、戦後の日本におけるモダニズム建築の展開を示す代表的事例と位置づけることができます。

## （２）日本を代表する建築家・前川國男の重要作品であること

前川國男（1905-1986）は、1928年に東京帝国大学建築学科を卒業後、20世紀を築いた建築家のひとりであるル・コルビュジエのもとで働きました。そして1930年に帰国して以降、建築と社会のあるべき姿を実作と著述によって示し続けた建築家です。

戦前の建築界においては歴史主義的デザインが主流であったため、前川の提示したモダニズム建築案は設計競技で落選し続けました。しかし戦後は徐々に実作の機会が増え、建築と社会をつなぐ手がかりとしての技術に注目して「テクニカル・アプローチ」という方法を提唱し、単なる形態操作としてではなく、建築総体としての近代化に挑戦したのです。また1970年代からは打ち込みタイルによる重厚な作風に転じ、モダニズム建築と地域性や歴史性といった文脈との関係を考え続けました。

したがって1960年に完成した京都会館は、前川國男におけるこのような思考過程を考える上で、きわめて貴重な建物と位置づけることができます。

## （３）京都の歴史的景観を構成する重要な建物であること

京都会館が建つ岡崎地区には、1895年に平安神宮が建立されたあと、京都府立図書館（1909年）、京都市立美術館（1933年）といった文化施設が次々に建てられてきました。したがってそれは、京都という伝統的都市が近代的な文化を受け入れ、自らと融合させてきた歴史を象徴する空間であるといえます。

一方、京都会館も、深い庇による水平性の強調やピロティや中庭による内外空間の一体化などの手法によって、モダニズム建築と日本的空間の特徴を融合させており、まさに岡崎地区という場所の特性を体現した建物といえます。したがって京都会館は、京都の歴史を構成する要素として必要不可欠の存在と位置づけられるのです。

以上から、京都会館は、文化的意義と歴史的価値を有する貴重な遺産と考えられます。しかしながら、この度の新聞報道によりますと、オペラを上演可能にするためという機能上の目的から、第1ホールの舞台の奥行と高さを現況の2倍の大きさに改築するという大規模な計画になっております。このまま計画が進めば、建築的な価値や周囲の景観に対する落ち着いたたたずまいが大きく損なわれる危険性を否定できません。本会としましては、その点を特に憂慮する次第です。それは、結果的に建物の歴史的な価値を減じ、そこに託されていた環境と調和するモダニズム建築への手がかりを失い、各時代の文化的資産を大切にしてきた京都の歴史にとっても将来への禍根を残すものになると考えます。

日本の近代の歴史を代表する、このかけがえのない建築遺産が後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。もし求められれば、本会は、この建物の保存・活用に際して、建築の専門家という立場から、助言をさせていただく所存であることを申し添えます。

敬具